

# 韓朝鮮固有簿記の特質管見

——玄丙周『四介<sup>サゲソンドジブ</sup>松都治簿法』を中心として——

ソ 徐      ヨン 龍      ダル 達

## 目 次

1. 序 言——「高麗時代に複式簿記あり」について——
2. 四介治簿法の理論的特質
3. 複記思考としての「四介」概念
4. 結 語——近代史の中の「四介治簿法」——

## 1. 序 言

西洋簿記が導入される以前の韓朝鮮<sup>1)</sup>には、いったいどのような会計実践が存在したのであろうか。それについては旧韓末に朝鮮新聞記者として活躍した日本人・田村流水の論稿「高麗時代に複式簿記あり」<sup>2)</sup>と「朝鮮商人と其簿記法」<sup>3)</sup>が比較的古い文献として挙げることができる。前者の一部を紹介す

1) 筆者らが二十数年前から常用してきた南北統一用語の「韓国・朝鮮」は、日本のマスコミ等にもほぼ定着しているが、歴史的な東西ドイツの統一を契機に、南北の統一をより近づける意図のもとに、新たに「韓朝鮮」の造語を用いることにしている。この新統一用語の初出は、「毎日新聞」1991年6月11日付「時代の目」欄の「公務員国籍条項は“差別”——日本に“共生”哲学を——」の文中にあり、その論拠の一部は、同紙92年9月11日付「私見／直言」欄の「原爆慰霊碑は“韓朝鮮人”で統一を」でふれている。

また、学会でもこの統一用語がすでに認識されている。たとえば、徐龍達、「韓朝鮮・中国固有の簿記」、森田哲弥、岡本清、中村忠編『会計学大辞典第四版』中央経済社1996年、199～200ページを参照。

2) 田村流水「高麗時代に複式簿記あり」『東京経済雑誌』（週刊）第76巻第1911号、1917年7月14日発行、17～20ページ。  
3) 同稿、「朝鮮商人と其簿記法」同上誌、第76巻第1914号、1917年8月4日発行、14～16ページ。

キーワード：韓朝鮮固有簿記，四介(松都)治簿法，開城簿記，人的勘定学説，擬人法

經濟財政政策及實業之要

明治二十年創立  
(每土期日發行)

# 東京經濟雜誌

第七十六卷 第一千九百一十一號

重要目次

<ul style="list-style-type: none"> <li>●市況週観……………(社説)</li> <li>●追加豫算案の可決……………(社説)</li> <li>●支那復讐問題の解決如何……………(社説)</li> <li>●文相に對する一般の思想を改めよ……………(社説)</li> <li>●米穀取引の斤量制と榷量制……………(社説)</li> <li>●米價に關する政府の意見……………(社説)</li> <li>●保護通商擴張問題……………(社説)</li> <li>●朝鮮行政の統一と鐵道の統一……………(社説)</li> <li>●高麗時代に複式簿記あり……………(社説)</li> <li>●開戦後著しく輸出額の増加したる商品(三)……………(社説)</li> <li>●戦争が與へたる教訓……………(社説)</li> <li>●上方だより……………(社説)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>△大正六年七月中央金庫集計概算稿……………(社説)</li> <li>△大正六年六月銀行會計集計概算稿……………(社説)</li> <li>△大正六年六月中央繰込金額……………(社説)</li> <li>△大正六年六月東京米相場概況……………(社説)</li> <li>△時局要聞、新聞紹介、法令、商況週報、經濟統計……………(社説)</li> </ul>
---	---

大正六年七月十四日發行  
(1917年)

れば次のとおりである。

「簿記学の著書が現れたるは西暦一千四百九十四年、彼の印刷術の発見せられたる後間もなくベニスに於て出刷せられ漸く一般に行るゝ様になった。是より後、英国に於ては千六百三十六年チャドグフォールン氏の著書現はれ、十八九世紀の商業の繁盛に偉大なる効果を与へた。仏国においては近々八十余年前、吾国に在っては最近の明治六年、大蔵省の會計課に使用せられたのが最初である。然るに朝鮮に在っては実に六百余年前、彼の高麗時代の開城<sup>ケソン</sup>に於て獨創活用せられて居ったといふに至っては、実に驚歎に価すべきものがある」。

「今余の精査した開城簿記は、其貸借の理勘定の応用、帳簿の分類等悉く

完全なる学理を基礎として活用せしこと、実に伊太利より二百余年前之を独創して居ったのである。高麗時代の首府開城は商業極めて繁栄にして大商小売軒を並べ、当時の金融財政の中央部と称せられ、実に文明の中枢たるの觀があつた。此商業取引の繁盛は遂に進歩した記帳法を發明せしむるに至った事朝鮮歴史の一端にあるを見ても明かである。」そして結論部分では、


「開城簿記法は其決算を求むるに當って複雑を極め、又杜撰なる点があつて、之を複式の夫れに比較対照して劣る處が尠ない。然し六百余年前の開城の実情に想倒する時は、却て其完全無疵を求むる者の無理なる注文と言はざるを得ない。高麗時代の往昔にして此技の活用を見たるを想へば、寧ろ驚歎に価すべきものがある。之をベニスに於て発見せられたといふ、複式簿記の沿革に見ても、其最初は極めて幼稚なる原理原則が幾多の研纂を経、苦心を経て、今日の完全した学技となった事は、歴史に証明せられて居る。されば歴史に隠れたる往古の開城に実にベニスより二百余年前此妙技の活用され居たる事實は世界學術界の一問題と言はざるを得ない。」と喝破している。

次いで、翌年の1918年に発行されたオーストラリア會計士協會の機関誌 The Federal Accountant の編集後記にも次のような記述があつた<sup>4)</sup>。

「企業の簿記法を最初に考案したのは誰なのか。コリア（高麗）だと考える人は誰もいないであろう。しかし複式簿記が發明され、実践されたのは高麗においてである。これは12世紀のことであり、それと同様な制度が当時の世界商業の中心であつたヴェネツィアにおいて考察されたのは、はるか後年の15世紀のことなのである。」

Who first thought of bookkeeping as a business method? One would never think of Korea, and yet it was there that double-entry bookkeeping was invented and put into use. This was in the twelfth century, while it was not until the fifteenth century that a similar

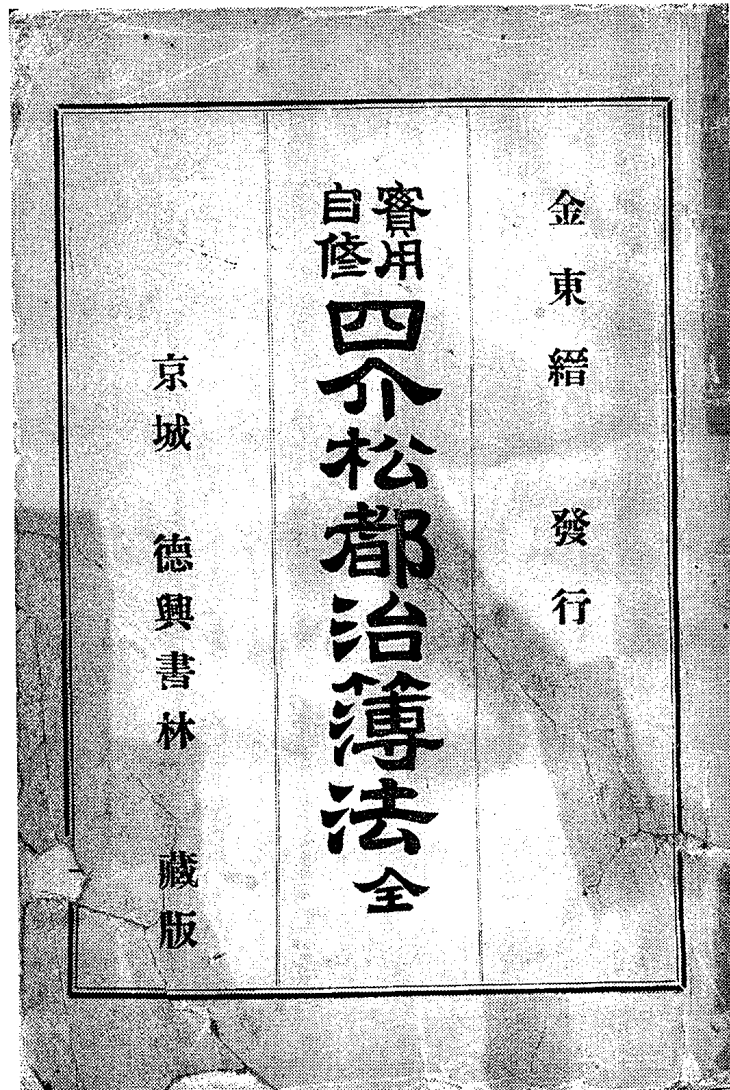
4) The Federal Accountant, Official Organ of Federal Institute of Accountants, Incorporated of Australia, Vol. 3, No. 3, July 1918, pp. 127-128, N. S. W. Divisional Notes.

 <b>The Federal Accountant</b> Official Organ of The Federal Institute of Accountants (Incorporated) of Australia																																			
Vol. 3, No. 3.	1st July, 1918. Price 1/- (Gratis to Members.)																																		
<b>Contents:</b>																																			
<table border="0"> <tr> <th>PAGE</th> <th>PAGE</th> </tr> <tr> <td>ACCOUNTANCY EDUCATION ... 100</td> <td>Revision of Rules ... 115</td> </tr> <tr> <td>EDITORIAL ... 87</td> <td><b>N.S.W. DIVISIONAL NOTES</b> ... 127</td> </tr> <tr> <td>EXAMINATIONS ... 113</td> <td>OBITUARY ... 99</td> </tr> <tr> <td>EDUCATIONAL ... 109</td> <td>OUR SOUTH AUSTRALIAN LETTER 108</td> </tr> <tr> <td>The Federal Accountant Educational Society Queensland ... 110</td> <td>OUR WEST AUSTRALIAN LETTER 114</td> </tr> <tr> <td>The Public Accountants Students' Society of South Australia ... 113</td> <td>PERSONAL ... 95</td> </tr> <tr> <td>The Public Accountants Students' Society of Victoria ... 109</td> <td>PROFESSIONAL NOTES ... 89</td> </tr> <tr> <td>"FOR KING AND COUNTRY" ... 106</td> <td>QUEENSLAND DIVISIONAL NOTES 102</td> </tr> <tr> <td>INSTITUTE ACTIVITIES ... 93</td> <td>QUEENSLAND STATE BOARD ... 101</td> </tr> <tr> <td>INSTITUTE MEETINGS ... 104</td> <td>Visit to Technical College ... 101</td> </tr> <tr> <td>Amalgamation ... 104</td> <td>TASMANIAN NOTES ... 119</td> </tr> <tr> <td>Amendment of Articles ... 105</td> <td>Lecture on "An Executor" ... 125</td> </tr> <tr> <td>Council Meeting ... 105</td> <td>Lecture on "Bankruptcy Law" ... 121</td> </tr> <tr> <td>MAY EXAMINATIONS 1918 ... 116</td> <td>Lecture by Mr. A. E. Walsley, A.F.I.A. ... 119</td> </tr> <tr> <td>Federal Income Tax ... 115</td> <td>VICTORIAN NOTES ... 100</td> </tr> <tr> <td></td> <td>Federal Taxation ... 101</td> </tr> </table>	PAGE	PAGE	ACCOUNTANCY EDUCATION ... 100	Revision of Rules ... 115	EDITORIAL ... 87	<b>N.S.W. DIVISIONAL NOTES</b> ... 127	EXAMINATIONS ... 113	OBITUARY ... 99	EDUCATIONAL ... 109	OUR SOUTH AUSTRALIAN LETTER 108	The Federal Accountant Educational Society Queensland ... 110	OUR WEST AUSTRALIAN LETTER 114	The Public Accountants Students' Society of South Australia ... 113	PERSONAL ... 95	The Public Accountants Students' Society of Victoria ... 109	PROFESSIONAL NOTES ... 89	"FOR KING AND COUNTRY" ... 106	QUEENSLAND DIVISIONAL NOTES 102	INSTITUTE ACTIVITIES ... 93	QUEENSLAND STATE BOARD ... 101	INSTITUTE MEETINGS ... 104	Visit to Technical College ... 101	Amalgamation ... 104	TASMANIAN NOTES ... 119	Amendment of Articles ... 105	Lecture on "An Executor" ... 125	Council Meeting ... 105	Lecture on "Bankruptcy Law" ... 121	MAY EXAMINATIONS 1918 ... 116	Lecture by Mr. A. E. Walsley, A.F.I.A. ... 119	Federal Income Tax ... 115	VICTORIAN NOTES ... 100		Federal Taxation ... 101	
PAGE	PAGE																																		
ACCOUNTANCY EDUCATION ... 100	Revision of Rules ... 115																																		
EDITORIAL ... 87	<b>N.S.W. DIVISIONAL NOTES</b> ... 127																																		
EXAMINATIONS ... 113	OBITUARY ... 99																																		
EDUCATIONAL ... 109	OUR SOUTH AUSTRALIAN LETTER 108																																		
The Federal Accountant Educational Society Queensland ... 110	OUR WEST AUSTRALIAN LETTER 114																																		
The Public Accountants Students' Society of South Australia ... 113	PERSONAL ... 95																																		
The Public Accountants Students' Society of Victoria ... 109	PROFESSIONAL NOTES ... 89																																		
"FOR KING AND COUNTRY" ... 106	QUEENSLAND DIVISIONAL NOTES 102																																		
INSTITUTE ACTIVITIES ... 93	QUEENSLAND STATE BOARD ... 101																																		
INSTITUTE MEETINGS ... 104	Visit to Technical College ... 101																																		
Amalgamation ... 104	TASMANIAN NOTES ... 119																																		
Amendment of Articles ... 105	Lecture on "An Executor" ... 125																																		
Council Meeting ... 105	Lecture on "Bankruptcy Law" ... 121																																		
MAY EXAMINATIONS 1918 ... 116	Lecture by Mr. A. E. Walsley, A.F.I.A. ... 119																																		
Federal Income Tax ... 115	VICTORIAN NOTES ... 100																																		
	Federal Taxation ... 101																																		
<b>THE FEDERAL INSTITUTE OF ACCOUNTANTS (Incorporated)</b> is represented in all the Australian States as hereunder:- <b>VICTORIA (Head Office):</b> A. Capper Moore, F.F.I.A., Collins House, 360-366 Collins St., Melbourne <b>QUEENSLAND:</b> G. K. Seabrook, F.F.I.A. 44 Adelaide Street, Brisbane <b>NEW SOUTH WALES:</b> Cecil Brierley, A.F.I.A., Daking House, Pitt Street, Sydney <b>SOUTH AUSTRALIA:</b> E. Sabine F.F.I.A. Brookman's Buildings, Grenfell Street Adelaide <b>WEST AUSTRALIA:</b> Regd. R. Long, A.F.I.A., Bank of N.S.W. Chambers, St George's Terrace, Perth <b>TASMANIA:</b> F. M. Lovett, F.F.I.A. 122 Collins Street, Hobart <b>CORRESPONDING MEMBERS:</b> Jas. Cole, A.F.I.A., c/o Silverton Tramway Co., Broken Hill, N.S.W. C. W. Aidney, A.F.I.A., c/o Morris Hedstrom Ltd., Levuka, Fiji																																			

system was devised in Venice, then the commercial centre of the world.

さらに、1923年に善生永助が朝鮮総督府で行なった調査資料『朝鮮人の商業』（1924年発行）の中で言及された開城簿記法の内容と写真が『朝鮮学報』にも掲載された。

「開城商人は質素勤勉、商機を見るに鋭敏で、殊に団結力強く、信用制度が発達して居ることは驚くべきもので」「この地に於て発達した開城簿記は夙に有名である。」「その様式は毫も西洋簿記に遜色のない特色を有し、記帳の方法は新式簿記に符号するものである。この簿記の発明は高麗朝の末期乃至李朝の初期の間にあつたらしいが……。開城に於て大正十年（1921年）頃、百五十年前に用いられた完全な開城簿記が発見され、同地の図書館に所蔵し



写真は玄丙周編著，1916年（大正5年）刊（徐龍達蔵）

て居る。」という<sup>5)</sup>。

つまり，1770年代の簿記書が朝鮮(北)に保存されていることになるが，南北の自由往来が待ち遠しい。

このような主張を生みだした史実ないし資料は明記されていないが，これらの論稿の直前，1916年に玄<sup>ヒョン</sup>丙<sup>ピョン</sup>周<sup>ジュ</sup>の『實用自修・四介松都治簿法 全』<sup>6)</sup>が発

5) 善生永助「開城の商人と商業慣習」『朝鮮学報』第46輯，朝鮮学会1968年1月，108および119ページ。

6) 玄丙周編著『實用自修・四介松都治簿法 全』京城 德興書林蔵版，開城 全璟植・裴俊汝并閲，金東縉發行，1916年，（韓朝鮮文，全124ページ）。

行されているので、この編書が根拠になったものと思われる。

韓朝鮮固有簿記は、日本では開城簿記として知られている。それは高麗時代（918～1392年）の社会経済的背景から判断して、当時の首都・開城（Kaesong）における王侯、貴族、僧侶、豪商らの上流階層によって行われた商業と高利貸活動を基盤として、その全盛時代に生成したものとされているが、当時の帳簿類はまだ発見されていない。

開城は高句麗・新羅・高麗・朝鮮にまたがって千有余年間も栄えた都市であり、高麗時代に開城が松嶽山麓にあったところから、松京、松都などと呼ばれた。開城簿記が「四介松都治簿」といわれるゆえんである。四介は四掛、四卦、四計、四開とも書かれ、治簿は帳簿を治める、つまり簿記を意味し、置簿、致簿、致富（富者になる）とも書かれている<sup>7)</sup>。

『四介松都治簿法』に対するこれまでの研究成果は、それが西洋の複式簿記とその根本原理においては互いに符号するものであるにもかかわらず、その思考や体系が決して同じものではなく、四介治簿法なりの独特の思考や体系をもっているという点にある。本稿においては、複式簿記としての『四介松都治簿法』の特質が何かについて考察しようとするものである<sup>8)</sup>。

7) 徐龍達「簿記史（韓朝鮮）」、神戸大学会計学研究室編、『第五版会計学辞典』同文館1997年、1129～1130ページ。

8) 四介治簿法に関する拙稿には、次のものがある（一部省略）。

①「韓国固有簿記研究の曙光——尹根鎬教授著『四介松都治簿法研究』によせて——」、『会計』第100巻第6号、1971年、137～153ページ。

②「韓国・朝鮮固有簿記の研究序説——世界印刷技術史からみた『高麗時代の複式簿記』——」木内佳市先生還暦記念事業会編『会計および会計管理の研究』同文館1982年27～34ページ。

③「韓国・朝鮮会計史の研究について——『松都四介治簿法』研究序説——」、『桃山学院大学経済経営論集』第25巻第4号、1984年、67～91ページ。

④「韓国・朝鮮固有簿記」神戸大学会計学研究室編『第四版会計学辞典』同文館1984年、199～200ページ。

⑤「韓朝鮮・中国固有の簿記」森田哲弥・岡本清・中村忠編『会計学大辞典第四版』中央経済社、1996年、199～200ページ。

⑥「簿記史（韓朝鮮）」神戸大学会計学研究室編、『第五版会計学辞典』同文館1997年、1129～1130ページ。

⑦「高麗時代の複式簿記」『大阪簿記会計学協会会報』第23号、1978年11月、2～3ページ。  
(次ページに続く)

『四介松都治簿法』（以下、四介治簿法と略す）の解説書で玄丙周は、治簿法の理論と実践を23章に分けてその内容を説明している。しかしそれは、四介治簿法を体系的・技術的に説明しようとした方法に過ぎないことであり、むしろ四介治簿法に内在する根本的な計算技術面の思考方法は、いろいろな研究成果を推してみれば、それはつぎの三点に集約することができる。すなわち、

第1に、四介治簿法は人的勘定学説、とりわけ徹底的に擬人説(personification theory)によっていること、

第2に、四介治簿法は、「四介」を複式記帳の技術的な根本だとしていること、

第3に、四介治簿法は、複式記帳方法のうえで固有の特色をもっていること、  
の3点である。

## 2. 四介治簿法の理論的特質

西洋における複式簿記発達史をみれば、複式簿記における勘定の意味とその記帳原理を説く場合、一般に人的勘定学説、いわゆる擬人説と、物的勘定学説とに分類される。人的勘定学説には、19世紀の産物である本来の人的学説もあるが、本稿の主題である玄丙周の所説とは直接のかかわりあいには乏しいのでしておくことにする。人的勘定学説は、近代的な資本主義経済の成熟以前の初期的形態の簿記学説であり、15世紀末のルカ・パチョーリ(Pacioli L.)の簿記書の説明として登場したものといわれ、勘定の擬人化にもとづく記帳技術の解説が中心となっている。

この人的勘定学説に対比される物的勘定学説は、19世紀末の株式会社制度の発達にともない、人的勘定学説の批判として、ヒューグリ(Hügli F.)、シェアー(Schär J. F.)らの学説を中心として展開されたものである<sup>9)</sup>。これら

⑧「高麗時代における複式簿記の生成」『高麗会報』第8号、高麗学士俱樂部結成20周年特集号、1979年、14～20ページ。

は近代的な会計理論生成の時期に主張され、静的貸借対照表論を背景にした静的勘定学説、また動的貸借対照表論、損益計算中心の立場から展開された動的勘定学説など、勘定記入の本質を物的対象の有高変動を記録し計算するところに特徴がある<sup>10)</sup>。これらの学説の提唱によって貸借対照表論争が展開され、ドイツ系会計学の生成・発展への導火線となったことは周知のとおりである。

さて、玄丙周の四介治簿では、その歴史的背景からして擬人説をとることになる。本来、人的勘定学説は、勘定と勘定への記入をすべて人格者、すなわち人間で擬制し、すべての取引は人と人との貸借関係によって統一的に会計を処理することだと主張する学説であるから、これを擬人説ともいうゆえんである。換言すれば、人的勘定学説では、資産、資本および負債にかんするすべての勘定に対し、これを一定の人格者とみなし、資産、資本および負債に影響を及ぼす一切の取引は、これら人格者間に発生した貸借関係とみなし、勘定の貸借をその本来の意味に解釈して記帳するものである。

すなわち、勘定は仮定のそれぞれの人格者を代表するものとみなし、取引はこれら人格者間に直接成立した貸借であり、「受取人は借方、引渡人は貸方」という単一の記帳法則によって記帳を整理するのである。この学説は勘定の貸借を文字とおりにみなすために、現金や商品などの物的勘定にたいしては、それをそれぞれ人格化し、現金保管人 (cashier)、商品保管人 (store-keeper) という人格者を勘定が代表するものとする。たとえば、商品を現金で購入した取引においては、現金を引き渡した現金保管人は、商品保管人にたいして現金を引渡したものであるから、現金勘定の貸方に記入し、一方の、商品保管人は現金保管人から受領したものとみなし、商品勘定の借方に記入する要領がそれである。

しかし、この人的勘定学説は人的1勘定学説 (Berliner M.) と2勘定学説 (Hügli F.)<sup>11)</sup> とに分かれ、その具体的な説明の方法を異にしているが、問題

9) 畠中福一『勘定学説研究』森山書店1932年、287ページ以下を参照。

10) 安平昭二『簿記理論研究序説』千倉書房1977、227ページ以下を参照。



は、人的勘定学説は人的勘定にたいしては適切な説明方法となるのだが、物的勘定にたいしては形式的な擬制，すなわち人として仮定しなければならないので非現実的であり，とくに損益取引の説明ではきわめて不備，不自然なものとなる。

このような簿記の発端は，人と人との間の貸借関係，いわば「人に与えたもの」と「私が受け取るもの」を正確に区別して記録しようとしたことから始まったものであり，これは四介治簿法においても，西洋のそれと全的に同じ論理だということに留意する必要がある。すなわち，帳簿の記入に際して，「入って来たもの（入）」と「出たもの（去）」を記し，「入って来たものは，人が与えたもの（給次）」であるから，後で返済する義務があり，「出たものは，人に与えたもの（捧次）」であるから，後で受け取る権利があるとみなし，この関係を入（給次）と去（捧次）として記帳したのである<sup>12)</sup>。

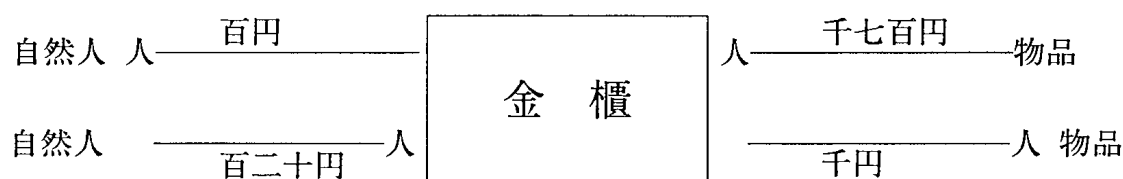
玄丙周は，このような権利と義務について，その主体が資本主ではなく，金銭を収める金櫃（かねびつ，現代では金庫）を金銭出納係（人間）になぞらえて説明している。すなわち，金銭の借入は金びつが債務を支払う義務があり，逆に，金銭を貸与した時には，金びつが債権をもつものとしている<sup>13)</sup>。つまり，金びつをして金銭出納係（人間）として擬人化し，それを主体として権利と義務を記録したのである。

このように，金びつを人間に擬制する思考は，商品を人間に擬制する考え方にまで拡大されている。すなわち，商品を取り扱う商品係（人間）を仮定し，貸借上の権利と義務を商品係との関係として取り扱っている。たとえば，商品の現金仕入では，商品係が金びつ（金銭出納係）から現金を借り入れて購入し商品を保管するとともに，将来，商品を販売してその代金を金びつに返済する義務を負うことになる。一方，金びつはその代金を受け取る権利がある，という考え方である。その実例として次の図式が紹介されている<sup>14)</sup>。

11) 畠中福一，前掲書，250ページおよび287ページ以下を参照。

12) 朴誠圭編『韓国固有の複式簿記——四介松都治簿法——』嶺南大学校出版部1988年，53ページ（韓朝鮮文）。

13) 玄丙周，前掲書，5～6ページ。徐龍達，前掲脚注8の③，81ページ。



左は金びつが債務自然人に百円を貸与していたのが、自然人が一定の期限に利息二十円とを合わせて返済する図である。

右は金びつが購入物品に千円を貸与していたが、物品は9か月目に利息七百円をそえて返済する図である。

さらに、取引当事者を示す人的勘定以外の物品勘定とか費用、収益勘定にたいしても、すべてそれを預かっている人とみなし、それを示す名称の後に「秩」字を付けて人として擬制したのである。たとえば商品の場合、綿布は「綿布秩」とし、それを預かっている人とみなしてその人を相手として貸借・権利義務を記録した。手形の場合には「手形秩」（魚験秩）とし、手形を預かっている人として考え、「公用秩」は費用を預かっている人として、また「利益秩」は収益を預かっている人として擬制し、記録したのである。このことから「秩」は、現代用語の科目、勘定を示すことになる。

### 3. 複記思考としての「四介」概念

「四介」は前述のように四掛、四卦、四計、四開とも書かれるが、その内容については開城の商業家たちの思考も一様ではなかったといわれる。「四介」の定義について玄丙周は次のように解説している<sup>15)</sup>。すなわち、

ある商人が最初に1万円の資本をもって営業を開始し、1年後に9千円の利益を得た。自己の消費した費用は2百円で、他人からの借入金2千円、1年後の決算時の現金残高が1万円だと仮定した場合、帳簿上の利益9千円は何々利益秩に生じるし、発生した利益9千円は捧次帳（資産帳）の借方、何々勘定に記録されており、費用の2百円は何々秩にいったん与えたもので、

14) 玄丙周，前掲書，7ページ。

15) 玄丙周，前掲書，13～15ページ。徐龍達，前掲脚注8の③，84～85ページ。

借入金 2 千円は給次帳（負債帳）の貸方、何々勘定に記録され、逐次、そこへ債務を返済する義務がある。このことから、捧次（資産）が一介、給次（負債）が一介、利益が一介、損害が一介、合わせて四介になると自称している。

この四介については、これまで 4 学説（①勘定種類説、②貸方・借方説、③帳簿種類説、④債権債務取引関係説）などいくつかの論評がなされているが<sup>16)</sup>、ここでは朴誠圭教授の所説を紹介するにとどめたい<sup>17)</sup>。

(1)まず、『四介松都治簿法』の四介を、開城簿記の帳簿組織から明らかにしようとした見解がある。この見方によると、四介治簿法は一名四介文書、四計文書あるいは<サゲダリ>文書ともいう点に着目し、これは四つの帳簿と関わっているとする。すべての取引を四つの帳簿に記帳処理するから、四介という名称が付けられたと考え、帳簿組織の観点から四介の意味を究明しようとする見解である。

しかし、ここで言う四つの帳簿も、それが具体的になにを指すのかについては研究者によって多少見解の相違があり、必ずしも統一されているわけではない。すなわち、四介は、外上帳冊（掛売帳）、他給帳冊（掛買帳）、日記帳、銘心録（補助簿）の四つの帳簿だという見解と、草日記、中日記（仕訳日記）、外上帳冊、他給帳冊の四つだという見解、草日記、外上帳冊、他給帳冊、会計冊の四つだという見解など、その内容はまちまちである。

帳簿の種類をあげて、四介の意味を解明しようとした代表的な研究者は田村流水だったが、彼の主張はあまり論理的に説得力を持っていなかった。帳簿の種類や組織についての要旨を簡単に明らかにするのは、上述の主張が適切ではないことを理解させるのに役立つからである。すなわち、前述の玄丙

16) 朴鍾文『簿記原理』東国文化社1955年、9 ページ（韓朝鮮文）。

李義俊『新簿記原理』全訂版、ソウル法文社1982年、32～33ページ（同上）。

尹根鎬『四介松都治簿法研究』檀国大学校出版部1970年、45～50ページ（同上）。

権淳白『四介治簿法文書の分析』慶北大学校学位論文1986年、20～27ページ（同上）。

徐龍達、前掲脚注 8 の③、82～86ページ。

杉本徳栄、『開城簿記法の論理』森山書店1998年、22～26ページ。

17) 朴誠圭、前掲書、55～61ページ。

周の四介治簿法の解説書によると、上に並べた四つの帳簿には主要簿と補助簿が混同されている。また、主要簿の外上帳冊と他給帳冊が必ずしも二分されているとはかぎらないし、時々二つの帳簿を合冊して一つの帳簿とした場合も多数あるという。日記の場合も、必ずしも草日記と中日記とに分かれているわけでもないし、むしろ草日記に記した内容をよく整理して、正しく記録したのが中日記であるから、帳簿の種類をあげて四介を説明したことは一見もっともらしく思われるが、内容的にはまったく論理に合わない主張だといえる。

(2)①大森研造教授の所説

次に、四介治簿法の「四介」をその記帳用語の観点から究明しようと試みたのは、大森研造と平井泰太郎の両教授である。大森研造は、「四介」について次のように論述した<sup>18)</sup>。

貸借の概念を明白にすることは簿記法の最大要件であり、現今の複式簿記法においては、常に相手側とみなして貸借を言い、その相手側では、人はもちろんのこと、人以外の物（有形物、無形物）、または事実（損益）にも人格を付与して人の如くみなすことである。開城簿記法においも、この観念は寸毫も異なるところはないが、ただその貸借という用語を使う代わりに、入、還給、捧次、還上の四つの記号として貸借関係を示している。すなわち、「入」は有価物の喪失、債務の発生、また利益の発生を、「還給」は借入金の返済、買掛金の支払などの債務の消滅を、「捧次」はその反対の場合に相当する有価物の取得、債権の発生、そして損失の発生を、「還上」は貸付金の返還、売掛金の回収などの債権の消滅を示す記号である。以上の四つの記号を四計といい、この四計のどれかによって取引の八要素がすべて示されるのである。

ここで彼は、西洋の複式簿記においては、貸借の意味が相手側を主として使われ、その相手側は人だけに限らず、物品や損益と同じような事実にも適用されたので、四介治簿法においても貸借をそのように示すのには同様であ

18) 大森研造「開城簿記法の形式と内容」『会計』第13巻第1号、1923年4月、55～56ページ。

るが、貸借という用語の代わりに、それを「入」、「還給」、「捧次」、「還上」の四つの記号を以って使ったとし、これを四計と称した。すなわち、大森研造は、四介治簿法においては西洋簿記で使われる借方、貸方の用語に該当するものとして、上述の四つの記号を発見し、それを四計と考えたのである。

## ②平井泰太郎教授の所説

また、平井泰太郎もこれと同じ見解を披瀝した。すなわち、彼は「捧次」、「還上」、「給次」、「還給」の四つの記号を、西洋複式簿記における借方と貸方に相当する記帳用語を示して四介とした。いいかえれば、彼は神戸大学編の『会計学辞典』で、開城簿記の中心構想としての四介は、(1)「捧次」とは人から持ってくるの意味、すなわち西洋の<dare>または<geben>に相当し、帳簿には「去」という文字が使われ、(2)「還上」は戻入の意味、(3)「給次」とは給付した人の意味、すなわち西洋の<habere>または<haben>に相当するものとし、それを示すには「入」という文字が使われ、(4)「還給」はその払い出しであり、けっきょくこれらは西洋簿記の借方と貸方にほかならないとした<sup>19)</sup>。

## ③尹根鎬教授の所説

以上の両教授の見解に対し、尹根鎬はその見解の不当なことを次のように指摘した<sup>20)</sup>。すなわち、「捧次」とは人から持ってくるの意味とされるが、「捧」字の本来の意味は人に与える意味である。人に与えたものは後でそれを再び受け取る権利が生じるから、これは債権（資産）となり、けっきょく、人から受け取ることとなり、また、相手側としては当然、当方に返済すべきものとなるから借方に相当する。すなわち、自分が捧げたものは、相手側が持つ

19) 平井泰太郎「開城簿記（四介松都治簿）」神戸大学会計学研究室編『会計学辞典』同文館1955年、77～78ページ。

Hirai Y., Originale „Vierfache“ Buchhaltung in Kaijo, Chosen (Korea) oder Chike-Songdo-Chibu. ZfB 3Jg. Heft 6. 7. 8, Berlin 1926. (本稿は平井論集に再録されている。神戸大学経営学研究室編『平井泰太郎経営学論集』, 千倉書房1972年、412～452ページ。)

20) 尹根鎬『韓国会計史研究』韓国研究叢書51, 韓国研究院1984年、40～42ページ (韓朝鮮文)。

て行ったものであり、したがって、四介治簿法では「捧次」や「去」は同じ意味を以って使われる文字である。また、「給次」は給った人であり、当方に与えたことを指すので、当方としては後で返済すべき義務があるので、負債となり、ときには資本となる。

しかし、相手側としては後で当方から受け取ることとなり、したがって、それは西洋式簿記の<habere>、<haben>に相当して貸方となり、これが帳簿上では「入」の字を使うとされたので、これもやはり、「給次」と同じ意味をもって使用される。したがって、四介の内容として、大森は「入」の字を、平井はそれを「給次」で、互いに異なる内容として表示したが、実はこれは同じ意味のものであるから、けっきょく両人の見解はまったく同じ内容のものなのである。しかし、四介治簿法では、日記帳に仕訳をして帳冊（元帳）に転記するものであるから、主要部の帳冊での記録は根本的に受け渡すもの、すなわち借方と貸方に相当するものであり、去（または捧次）と入（または給次）の二種類の文字が使われた。だが、日記帳では去と捧次、入と給次という文字の代わりに、その記録の内容をより明らかにしようとする実務上の便宜にしがって、さまざまな他の用語も使われてきたという。

たとえば、受け渡したものを戻し受けたり戻し渡す場合に、「還上」、「還給」という用語を、「還上」という用語の代わりに「還入」という用語を、また「還給」の代わりに「給」の字だけを使ったこともあったのである。さらに、貸付金を貸し出した場合には「債給」と書き、借り入れした場合には相手側の人名の次に「入」の字の代わりに「貸入」とも書いた。のみならず、掛売の場合、「何某去」の代わりに「何某放……」のように、「放」の字を使った場合もあった。

このように、日記帳で「去」と「入」の字の代わりに、いろいろな代替用語を使用したのは、四介治簿法が生成・発展する過程で生じた現象だといえようし、とりわけ日記帳は日記であり、仕訳帳であると同時に、日記帳の固有の役目も果たすべきものなので、個々の取引の特殊性を表わすため、そのような各種の特殊用語を使ったという。それにもかかわらず大森、平井らは、

日記帳に用いるいくつかの特殊な代替用語があるとして、それが本来持っている意味とは係わりがない「入」、「還給」、「還次」、「還上」とか、「捧次」、「還上」、「給次」、「還給」の四つの用語を選び、これを四計あるいは四介としたことは良からぬ主張だと述べている。

(3)「四介」の意味を、前述の二つの場合とは異なって、勘定の性質によって究明した見解である。すなわち、四介治簿法にたいする唯一の解説書を書いた玄丙周は、取引をどのような勘定で処理するかを基準として、捧次が一介、給次が一介、利益が一介、損害が一介、あわせて四介とした<sup>21)</sup>。いま、これを今日の会計用語で表現するならば、捧次は資産を、給次は負債と資本を、利益は収益を、損害は費用を意味するものであるから、けっきょくすべての取引は、それを帳簿に記帳することにおいては、いわゆる、貸借対照表勘定としての資産勘定（捧次秩）と負債・資本勘定（給次秩）で、また損益計算書勘定としての収益勘定（利益秩）と費用勘定（消費秩）で処理すべきものであるから、これら資産勘定、負債・資本勘定、収益勘定、費用勘定の四つの系統の勘定を四介というのである。

このような玄丙周の「四介」にたいする説明は、数百年前の四介治簿法が生成する当時から、そのような構想から出発したかどうかについては、当時を説明するに足る正確な資料がないので断言できないが、今日における財務会計の目的が財務計算と損益計算にあることを考えれば、「四介」をこのように貸借対照表勘定としての資産勘定と負債・資本勘定、損益計算書勘定としての収益と費用勘定の四つだということは、四介治簿法の計算目的が始めから財務計算と損益計算にあったということを示す結果となるから、まことにおどろくべきことである。玄丙周のこのような四介の解説にともなう論理にたいしては、また稿を改めて考察すべきであろう。

(4)おわりに、四介治簿法に関して多数の研究成果のある尹根鎬の「四介」にたいする独自の見解がある。すなわち、尹根鎬は、四介治簿法における「四

---

21) 玄丙周、前掲書、15ページ。

介」の意味を、複式記帳のための四つの記入要素、いわば複式記入の実際の内容面で四介がなにかを明らかにしようとした。彼の主張によると、東西を問わず簿記生成の直接の動機は、人と人との貸借関係による債権債務の記録にあるので、当方が他人から受けたものは後で返済の義務があり、当方が他人にあたえたものは後で受ける権利があることを記録するのは、債権者と債務者間の権利義務に相互依存関係があるからである。なによりも渡す人と受ける人、すなわち債権者と債務者が明らかにされなければならないし、同時に、交換によって有形・無形のものが受け払いされるので、それが何であるかをはっきり決定すべきものだとした。そして簿記に先立ってまず決定すべきことは、渡す人（債権者）、受ける人（債務者）、与えるもの（有形および無形物）、受けるもの（有形および無形物）の四つの記入要素として、これは複式簿記の記録において根本的に決定すべき基本事項であり、これらの記入要素を指して「四介」といい、この四つの事項に係わる治簿法を「四介治簿法」だというのである<sup>22)</sup>。

尹根鎬によれば、「四介」は四つの帳簿、四つの記録用語、四つの勘定種類などの形式を意味するのではない。韓朝鮮で取引のことを「去来」というように、記録の対象はまさしく物財の「去り」「来たる」ありきまである。つまり、物財の去来は必ず与える人と受け取る人の両当事者がおり、また与えられる物と受け取られる物があることを認識し、それらの四個を「四介」だと解釈するのである<sup>23)</sup>。

とくに以上のような「四介」の主張は、それが東洋の基本思想である中国の陰陽五行思想と四象（春夏秋冬）哲学、また高麗朝を風靡した仏教思想における四諦思考、あるいは四肢の原理に基づいた論理的な主張だという点は特記すべきものである<sup>24)</sup>。

22) 尹根鎬，前掲書，45～50ページ。

23) 徐龍達，前掲脚注8の①，144～145ページ，同脚注8の⑥，1129～1130ページなどを参照。

24) 尹根鎬，『四介松都治簿法』の東洋思想的根源『会計』第111巻第1号，1977年1月，123ページ以下を参照。



## 4. 結語——近代史の中の「四介治簿法」——

韓朝鮮には、以上のように古くから「四介治簿法」のような固有の複式簿記があったとされており、それが主として高麗時代の首都・開城で商人たちに使用されたことから、「開城簿記」ともいわれてきた。しかし、それは今はほとんど実用されていない歴史的文化遺産であり、現在のところ、実物としては1770年代の帳簿が朝鮮(北)の開城図書館などに保存されているかもしれない、というほどの不確実な研究対象ではある。

しかし、日本固有の帳合之法ないし和式帳合法、たとえば「出雲帳合の研究」(平井泰太郎, 山下勝治), 『江州中井家帳合の法』(小倉栄一郎), 『江戸時代の帳合法』(河原一夫)なども、明治初期における西洋簿記の導入とその実践にともない、和式帳合が消滅していった史実も考えるべきであろう。日本の場合と同様に、旧韓末の開化期韓朝鮮においても、基本的にはそのような時代的背景があって、西洋簿記書としては1908年(隆熙2年2月)に任璟宰の『簡易商業簿記学』(徽文館)と同著『新編銀行簿記学 全』(1908年1月, 徽文館)が出版され、また翌年には、金大熙の『応用商業簿記学・附工業簿記学』(義進社)も出版されることになった。

そのうえ韓朝鮮の場合には、日本帝国主義による侵略、植民地支配にともない、会計制度も逐次、当時の日本会計制度に順応せざるをえなかったことも考慮すべきであろう。1904年(明治37年)2月、韓朝鮮と満州を支配するために、日本は対ロシア宣戦布告をなし、早くもその2週間後には、「日韓議定書」を強要して調印させ、韓朝鮮を「保護国」化したのである<sup>25)</sup>。同年8月、日本の大蔵省主税局長・目賀田種太郎を高給の韓国政府財政顧問として押しつけ<sup>26)</sup>、それまでの旧韓国(1897年に朝鮮は国号を大韓帝国に変更)の会計法等を改廃させ、1905年(光武9年)6月、「一般会計法規」を整備し、

25) たとえば、渡部学編『朝鮮近代史』勁草書房1968年、84～86ページ、および山辺健太郎『日韓併合小史』岩波新書1966年、151ページ以下を参照。

26) 目賀田種太郎、『韓国財政顧問時代』故目賀田男爵傳記編纂会、1938年、344～347ページ。

特別会計法規を定め、翌年には会計検査局を新設して日本とほとんど同様な会計制度にしてしまったのである<sup>27)</sup>。

そのような強制にもかかわらず、ここで取りあげた玄丙周編著『四介松都治簿法 全』は1916年（大正5年）の出版であり、さらに28年には3版が出版されているので、その前後まで韓朝鮮固有の文化財が実践されていたと考えることができる。たとえば、韓国商業銀行の前身であった大韓天一銀行の体系的な帳簿<sup>28)</sup>や「開城簿記帳簿」<sup>29)</sup>、朝鮮朝の会計<sup>30)</sup>などがその事例である。ただ惜しむらくは、「高麗時代に複式簿記あり」と題した田村流水の論稿を実証するものが発見されていないことである。歴史科学は、すべからく具体的な史料によって実証されなければならないからである。

本稿では、複式簿記の本質論にかかわる「四介」の類型的考察によって、韓朝鮮固有簿記の特質を垣間見ようとしたものである。もとより限られた史料のなかで、多少の独断は覚悟のうえでの推考である。本稿においては、これまでの韓朝鮮固有簿記に関する先駆的な研究者である大森研造、平井泰太郎らによる「四介」の解釈が、「入」「還給」「捧次」「還上」または、「捧次」「還上」「給次」「還給」の4個であり、それは形式的な要素にすぎないと批判する尹根鎬の所説をとりあげてみた。前述のように、尹は「四介」の解釈を素朴な「取引」に着目して主張している。すなわち、「取引」を意味する韓朝鮮語の「去来」を起点として、物財の「去り」「来たる」有様を捉えた新しい解釈を展開した。

同時に、東洋哲学の陰陽思想や仏教思想の援用による「四介治簿法」生成

27) 目賀田種太郎、同書、406～409ページ。

28) 趙益淳「四介松都治簿法に関する小考——大韓天一銀行の記録と公開文献を中心として——」『経営研究』（高麗大学校）1968年8月号、26ページ（韓朝鮮文）。

尹根鎬、前掲書、102ページ以下を参照。

朴誠圭、前掲書、153ページ以下を参照。

29) 杉本徳栄、前掲書、103ページ以下を参照。

30) 尹根鎬、「朝鮮王朝会計制度研究」『東洋学』第5輯、檀国大学校東洋学研究所、1975年、1～18ページ（韓朝鮮文）。

朴源澤、「朝鮮朝の官庁会計」、慶北大学校博士論文、1987年12月、1～165ページ（韓朝鮮文）など。

の社会経済的背景は、彼なくしては生まれえなかった論法だと痛感した次第である。リトルトン (Littleton, A. C.) のいうように、複式簿記の特質は、けっして「複式」という名称のもたらず形式の二重性や結果の均衡性に求められるのではない<sup>31)</sup>。取引が「与える人」と「受け取る人」、「与えられる物」と「受けとられる物」という対立物の統一として把握されるとき、勘定記録はよりいっそう正確になりうるものである。

終わりに、近い将来において韓朝鮮固有簿記の体系等が明確にされ、それと日本固有簿記との関連の有無、さらにはこれらと西洋簿記との異同が明確にされるならば、古代からの東西交流の実態が浮かびあがって簿記会計史論も一大エポックを画することになるかもしれない<sup>32)</sup>。

(SUH Yong-Dal／経営学部教授／2000年11月10日受理)

---

31) Cf. Littleton, A. C., *Accounting Evolution to 1900*, New York, 1933, p. 22 ff.

32) 徐龍達, 前掲脚注 8 の⑧, 20ページ。

On the Distinctive Features  
of “Sagae Songdo Chibu-Bŏp”  
as a Double Entry Bookkeeping in Koryo Dynasty

SUH Yong-Dal

In Korea, there was a peculiar method of bookkeeping called “Sagae Songdo Chibu-Bŏp”, the Four Elements Bookkeeping in English, which in fundamental principle coincides with the double entry bookkeeping of the West Europe.

Songdo, nowadays Kaeseong, was the capital of Korea during Koryo Dynasty, 918-1392. It has been generally believed that Korea had already had a superior accounting method earlier than the year of 1494 when the double entry bookkeeping was first introduced by Fra Luca Pacioli as “Summa de Arithmetica, Geometria, Proportioni et Proportionalita”.

“The Federal Accountant”, Official Organ of the Federal Institute of Accountants (Incorporated) of Australia, reported the following sentence as N. S. W. Divisional Notes:

“Who first thought of bookkeeping as a business method? One would never think of Korea, and yet it was there that double-entry bookkeeping was invented and put into use. This was in the twelfth century, while it was not until the fifteenth century that a similar system was devised in Venice, then the commercial centre of the world.”

To our regret, however, the said editor is unidentified and the supporting data for this information has not come to light.

The books kept by this Korean method of double entry yet discovered and preserved are not many, except those in North Korea, supposed to have been used in the latter part of the 18<sup>th</sup> century, and three volumes in Japan. The latest discoveries are the books 1899-1905 of the “Daehan

Cheon-Il Unhaeng”, former the Korean Commercial Bank, where they are preserved in its headoffice.

The first literature about the Korean bookkeeping appeared in 1916 in a published book entitled “Sagae Songdo Chibu-Bōp”, the Four-Element Songdo Bookkeeping method” in English, written by Hyeon Byeong-Ju, which was followed by some other introductions of Japanese authors after 1917. Therefore, it is presumed that the comment in the Federal Accountant, Australian magazine was also based on this literature.

The objective this paper is to explain the basic theory and concept of Sagae Songdo Chibu-Bop by the book of Hyeon Byeong-Ju mentioned above.

According to Professor Yun Kun-Ho, transactions or the objects of bookkeeping in Korea are called “Keo-Rae”, going and coming, meaning the exchange of property, in which there are two parties—a giving person and a receiving person—in addition to two things given and received. These four elements are the indispensable factors in bookkeeping. Accordingly, the original Korean bookkeeping is called four-element bookkeeping. The four elements are relatively handled and no transaction is made by their individual transfer or change in the idea of the four-element bookkeeping method.

Finally, in the four-element bookkeeping, the original Korean bookkeeping method, all records are kept by noting the coming and going of commodities. In the records are two parties—the giving person and the receiving person which tell what are given and received. The four elements are essential factors to the record, hence the name, which finds its basic idea deeply rooted in the ‘yin’ and ‘yan’ principles of oriental philosophy. That books upon everything from the view point of relativity as reciprocal objects of the record. With sincerely thanks for the late Professor Yun Kun-Ho.